『般若波羅蜜考究』における「法輪」の研究

（要旨）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D183137
氏名：才華加

論　文　の　要　旨

ふりがな 氏　名	ツェホージャ 才華加
論文題目	『般若波羅蜜考究』における「法輪」の研究

論文の目的と方法

チベット仏教ゲルク派デプン僧院ゴマン学堂で活躍し、故郷の東チベットにラブラン僧院を建立したことで知られる学僧ジャムヤンシェーパ（1648–1721/22）は、般若学の教本『般若波羅蜜考究』(*Phar phyin mtha' dpyod rin chen sgron me*) 第一章において、仏教思想の根幹ともいえる「法輪」の概念を分析している。「法輪」とは仏陀によって説かれた「車輪」に類似する様々な特性を具える聖言であり、またその聖言によって獲得される美質のことでもある。

ジャムヤンシェーパはゲルク派の祖ツォンカパ (1357–1419) やギェルツァプジェ (1364–1432) の見解を踏まえて「法輪」の概念を理解し、サキャ派の「法輪」や「三転法輪」に関する見解を批判した上で、独自の仕方で解釈する。本研究は『般若波羅蜜考究』「法輪」節の解読により、ジャムヤンシェーパによって展開された「法輪」に関する見解の特色を明らかにし、その思想史的意義を明らかにするものである。

論文構成

本論文は「序論」「第Ⅰ部・本論」「第Ⅱ部・附論」より構成される。「本論」は全 3 章及び結論から、「附論」は翻訳研究からなる。

序論

序論では、チベット仏教における般若思想の展開およびラブラン僧院の般若学研究の成立とその実体、特にジャムヤンシェーパによって著された『般若波羅蜜考究』の成立とその関連文献について詳説した上で研究の目的と方法を提示した。

第 1 章「法輪」の定義

第 1 章では、「法輪」の概念と定義について考察した。

第 1 節「インド仏教における法輪の概念」では『転法輪経』、『倶舎論』、『解深密経』、『現観荘厳論註』などといった、初期仏教から大乗仏教までの諸経典・論書における「法輪」の概念について精査し、その思想史的展開を検討した。初期仏教経典の『転法輪経』では、仏陀によって説かれた八支聖道や四諦の教えが法輪とみなされている。一方、部派仏教のアビダルマの教義では、仏陀の教えを聞いた者に生じる理解、あるいは修行によって獲得される道が法輪とみなされている。次に、大乗仏教では、仏陀によって説かれた十二分経が法輪とみなさ

れている。大乗仏教では、アビダルマの教義も踏まえ、修行者が獲得する道を法輪とする考えも認められる。さらに、大乗経典『解深密経』では、様々な所化を各々異なる教えによって教導するという観点から、法輪を初転法輪・中転法輪・後転法輪の三段階に区別する独自の解釈が現れ、この解釈が後のチベットの議論へと発展する。

第2節「法輪の解釈」ではチベット仏教各派の伝統における「法輪」解釈の変遷を検討した。サキャ派のロントン・マウェ・センゲは「法輪」を「自身の反対項目（煩悩等）を排除する能力という美質」と捉えるが、ゲルク派のジャムヤンシェーパは、その定義によれば、既に煩悩障・所知障を離れており反対項目の排除を必要としない一切相智が法輪として承認できなくなってしまうという過失が起こるとしてロントン・マウェ・センゲの見解を否定する。

第2章「大乗仏教の聖言観」

第2章では、「法輪」の分類項目である聖言と証得の二つの内、聖言をめぐる議論について考察した。聖言をめぐる議論への導入として『解深密経』のチベットにおける受容と展開を考察した。

第1節「『解深密経』と三転法輪」では、チベット人の唯識思想理解に重大な影響を与えた『解深密経』のチベットにおける受容と展開を考察した。チベットでの『解深密経』解釈において争点となるのは、後転法輪として説かれる三性説に関するチョナン派ドルポパの他空説をどのように評価するか、圓測の注釈をどのように理解するかといった問題である。ツォンカパの『善説真髄』とその註釈書群が、チベットにおける『解深密経』の受容と展開を探る上で重要な資料となるのである。

第2節「大乗仏教の聖言観」では仏陀によって三転法輪という形で示された聖言の時間性について考察した。ジャムヤンシェーパに先行するチベットのチム・チェンモ（Mchims chen mo）やチャク翻訳官は、三転法輪は段階的に説かれたと主張するが、ジャムヤンシェーパは、その解釈は〈共通の見え方〉と〈独自の見え方〉のいずれの観点から見ても合理的でないと論じる。ジャムヤンシェーパによる「三転法輪」解釈の根底にあるのは、衆生が存在する限り仏陀は三転法輪の全ての教えを常に説き続け、一切衆生の救済のために同時的にあらゆる国土であらゆる教えを説くという大乗仏教的思想である点を明らかにした。

第3章「了義未了義の解釈」

第3章では、唯識派と中観自立論証派のそれぞれの学説における聖言の解釈、特に了義・未了義の弁別の問題について考察した。

第1節「唯識派による了義・未了義の弁別」では大乗仏教唯識派における了義・未了義の概念について精査し、その思想史的展開を考察した。唯識派の学説では、言葉通りの理解が可能である経典が了義経であり、言葉通りの理解が可能でない経典が未了義経であると考える。この『解深密経』の説に立脚したヴァスバンドゥやラトナーカラシャーンティの理解は後のチベットの議論へと発展し、セラ・ジェツンパやパンチェン・ソ ナムタクパなどによる唯識派にお

ける了義・未了義の理解の根拠となった。

第2節「中観自立論証派による了義・未了義の弁別」では「勝義諦を主に述べる経典」が了義、「世俗諦を主に述べる経典」が未了義であるという中観自立論証派（カマラシーラ、ハリバドラなど）の学説に対するジャムヤンシェーパの理解について検討した。彼は『無尽意経』の説およびそれに基づくカマラシーラの説に依拠して、了義・未了義の弁別にあたって、「言葉通りの理解が可能か否か」という基準を全く考慮せず、「勝義諦という確定対象を語っているか否か」という一つの基準のみを考慮する。この点で彼は、了義・未了義の弁別に関して、セラ・ジェツンパとパンチェン・ソナムタクパとは異なる説明方法を用いている。これによって、ジャムヤンシェーパはセラ・ジェツンパやパンチェン・ソ ナムタクパが注意を向けていなかったカマラシーラの了義・未了義に関するもう一つの見解を明らかにしようとしたのだと思われる。

結論

以上のように、ジャムヤンシェーパによる「法輪」解釈の特色は、サキャ派ロントン・マウェ・センゲなどの見解を批判的に検討しながら、法輪の定義や時間性、了義未了義の区別を先代のチベット仏教学者とは異なる説明方法を採用して解釈している点にあることが明らかである。彼の「法輪」に関する見解は、彼以前の時代に成立していたゲルク派僧院教本の解釈に完全に従うものではなかった。彼は他学派（サキャ派など）の見解において過失が認められる場合は、その誤った見解を徹底的に批判し、自説を立てることによって正しい解釈の提示を試みた。

「法輪」の概念は既にインドで成立していたが、仏陀の一切相智が法輪の中に含まれるか否かという問題は、インド仏教論師者の間では議論されていなかったようである。一方、チベット仏教ゲルク派のジャムヤンシェーパは、その問題を取り上げている。彼は仏陀の一切相智は、説法などを通じて所化の心相続に働きかけを行なう、すなわち「移行」するので、車輪に類似する性質を有するから、当然ながら「法輪」の中に含まれると考えた。しかしながら、従来のサキャ派のロントン・マウェ・センゲが提起する定義に基づけば、一切相智を法輪として位置づけることができなくなってしまうのである。したがって、ジャムヤンシェーパはロントンの「法輪」定義を見直す必要があると考えたのである。

さらに、三転法輪の時間性に関して、ジャムヤンシェーパは三転法輪の時間的前後関係を主張するチムなどの見解を批判的に検討し、三転法輪は仏陀によって段階的に説かれたのではなく、あらゆる教えがあらゆる国土で同時的に説かれたのであるという大乗仏教的な考えを示している。

また、『般若心経』の了義・未了義説において、セラ・ジェツンパやパンチェン・ソナムタクパなどは中観自立論証派の見解においても「言葉通りの理解が可能か否か」が了義・未了義を区別する一つの基準として必須であると考える。一方、ジャムヤンシェーパは『無尽意経』に忠実に従えば、「勝義諦という確定対象を語っているか否か」という一つの基準のみを考慮

するだけで、「言葉通りの理解が可能か否か」という基準を考慮しなくてもよいと考える。したがって、ジャムヤンシェーパの理解では、言葉通りの理解が可能でない『般若心経』であっても、それは勝義諦が説かれる経典であるという理由から了義経であると考えるのである。

このように、自派の他学堂の教本に関しても、例えば、セラ・ジェツンパが注意を払っていなかったところに向けて注意を向け、別の解釈方法を提示した。ジャムヤンシェーパはそれによって、カマラシーラやツォンカパの見解の多様性、あるいは、大乗仏教中観派の了義・未了義の理解の多様性を示そうとしたと考えられる。

附論

附論では、ジャムヤンシェーパ『般若波羅蜜考究』「法輪」節のチベット語テキストおよび翻訳を提示した。